

【ポスターセッション】

実習におけるソーシャルワーク理解とケアワークとの関連

ー社会福祉実習生アンケート調査の分析からー

○ 龍谷大学 氏名 土田 美世子 (01884)

高松 智画 (龍谷大学・01859)

[キーワード] ケアワーク、社会福祉実習、ソーシャルワーク

1. 研究目的

本研究は、社会福祉士実習におけるソーシャルワーク理解と、利用者に対するケアワークの実施の関連についての考察を目的とする。社会福祉士養成における実習は「ソーシャルワーク実習」と規定され、介護福祉士養成等で実施される「ケアワーク実習」とは一線を画することが求められる。しかし、利用者との信頼関係を形成する段階の実習生が、面接等を実施し相談援助を「実践」することは困難であり、現場でのソーシャルワークの伝達方法については課題がある。龍谷大学の実習内容調査(2013)において「どのような方法でソーシャルワークを学んだか」という問いに対して、「ソーシャルワーカーの職務に同行実習、職務の観察実習、職務について話を聞く」等、ワーカーの職務を間接的な方法で学んだ者が9割で、利用者への面接等を実践した者は全体の1割程度だった。

一方、生活型の施設においては、「生活場面面接」として、利用者の身の回りの世話をするケアワークに伴い、ソーシャルワークが実施されることが知られる。また、実習生にとってケアワークは、利用者との信頼関係を形成する重要なコミュニケーションツールとなりうる。本研究では、社会福祉実習生へのアンケート調査の分析を通じ、ケアワーク実践とソーシャルワークの学びとの関連を検討する。

2. 研究の視点および方法

社会福祉実習を履修した実習生170名に対し、pre(実習前)-post(実習後)デザインのアンケート調査(自型式)を実施した。調査実施時期は2013年9月、及び12月である。

pre調査においては、実習生のこれまでのケア経験(ケア経験の有無、及び配属された実習施設の利用者に対するケア経験の有無)、実習参加動機、課外活動経験等、プロフィールを確認した。また、実習の学びに関連する項目として、「多次元共感性尺度(鈴木, 木野, 2008)⁽¹⁾」を用いて実習生の共感性を計測した。post調査においては、利用者に対する直接的ケア実施の有無、経験した実習内容の他、ソーシャルワークの理解について回答を求めた。アンケートの集計及び分析には、IBM SPSS Statistics22、及び自由回答のテキストマイニングには IBM SPSS Text Analytics for Surveys4を用いた。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守し実施した。また、アンケート調査の実施にあたっては調査の趣旨を説明し、結果の公表について周知した上で回答を求めた。

集計に際して各回答者に ID を割り当て pre-post での対応を確保すると同時に、匿名性の担保を徹底した。回収したデータは、細心の注意を払って管理した。

4. 研究結果

結果について、以下の3点を報告する。

①post 調査でのソーシャルワークの理解度と、pre 調査でのケア経験についてクロス集計を行った。 χ^2 検定の結果、両者に有意な関連は見られなかった。

②post 調査での利用者に対するケア実施の有・無に分けて、post 調査でのソーシャルワークの理解程度について、多次元共感性尺度の項目(被影響性：他者の感情や意見に影響されやすい傾向を表す、他者指向反応：他者に焦点づけられた情動反応を示す、想像性：自己を架空の人物に投影させる認知傾向を示す、視点取得：相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向を表す、自己指向反応：他者の心理状態について自己に焦点づけられた情動反応を示す)のスコアを高・低に分けてクロス集計を行った。 χ^2 検定の結果、ケアの実施有りの実習生に関して、ソーシャルワークの理解程度と他者指向反応について有意な結果が得られた($\chi^2(2)=10.305, p<.01$)ので、残差分析を行った。結果は表1の通りである。実習でのケアの実施経験は、他者指向反応のスコアが高い群はスコアが低い群よりもソーシャルワークの理解が進むことがわかった(その他詳細については当日報告)。

表1. ケア経験有 / SWの理解程度 × 他者指向反応				
		他者指向反応		合計
		低	高	
SW の 理解	理解できなかった	1	0	1
	どちらともいえない	▲17	▽4	21
	理解できた°	▽50	▲62	112

③ソーシャルワーク理解に役立った内容について、自由記述で回答を求めた。テキストマイニングの結果、面接、他職種連携、コミュニケーションなどの用語の他、特に児童福祉施設の実習においてはケア、生活支援などの用語が抽出できた(詳細については当日報告)。

5. 考察

今回の調査では、他者指向反：他者に焦点づけられた情動反応(例えば、自分に関係しなくても他者の成功を応援する等)が、ソーシャルワークをケアワークと関連させる学びに影響することが確認できたが、ケアワーク実施とソーシャルワーク理解の関連を直接的に抽出できなかった。これは、ソーシャルワークと価値を共有して実践されるケアワークを特定できなかったためであると考え。利用者に対する生活支援を含むケアワークをソーシャルワークの学びのツールとして位置付けることができれば、実習生のソーシャルワーク理解は格段に進むのではないだろうか。ケアワーク構造が明確になれば、実習生はケアワークの実践を通じて、個別支援計画、他職種連携、他機関連携、地域支援、等のソーシャルワークの技法を、利用者の生活と結び付けて理解することが容易になると考える。

* (1)鈴木有美・木野和代(2008)「多次元共感性尺度(MES)の作成」教育心理学研究 56,487-497